

「文化による抵抗」との関わりについて、もっと言及してほしかった。

こうした疑問を呼び覚ます本書は、「国家原理」「市場原理」の否定という課題に直面しているわたしたちに投げ掛けられたボレミックな一石といえよう。

池田五律

加藤哲郎著 『コミンテルンの世界像』

青木書店

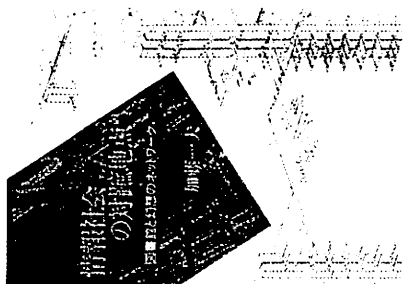
定価九七八五円(本体九五〇〇円)

本書は、コミンテルンの綱領の確定過程を研究した五〇〇頁余の大冊で、一読するだけでも難儀であるが、膨大な文献と資料が紹介・活用されていて、その点では「本格的な学問的研究」となっている。「社会主義の敗北」が常識になりつつある今日状況において、コミンテルンの歴史をテーマにしてこれだけの大冊を著した加藤哲郎氏の努力は敬意に値いする。とても三枚の短評で書くことはできないが、コミンテルンをめぐる歴史的

事実と動向について、教えられるところは多い。

しかし、少しでもコミンテルンや国際共産主義運動に問題意識をもっている者にとつては、本書にはあまりに大きい欠落があることを指摘せざるをえない。

たとえば、一九二二年のドイツの三月蜂起の失敗は、「ドイツ『三月行動』とのかかわりで」という書き方で何年のことかも、行動の中身も評価もまったく抜きに出てくるにすぎない。周知のように、三月蜂起の失敗はコミンテルンの「統一戦線」を考察するさいに欠かすことのできない歴史的経験だったはずである。二七年の「国共合作」も英露委員会の失敗も「終焉」とか「終結」とかと一



遠も限界である。さすがに、六回大会での綱領にたいするトロツキーの批判については、注にトロツキーの著作が出てくるが、その内容の紹介はない。

加藤氏は、レーニン死後のトロツキーやスターリンなどの論争について「レーニンの片言隻語の『引用合戦』と評している。しかも「『二国社会主義建設・勝利の可能性』をめぐる」論争と言うだけで「世界革命」は論点から外される。

これらの限界は、本書の根本視点に歪みがあることを示している。「ここで『世界政党的理念』と名づけたものは、必ずしも『世界革命の理念』とは同義ではない。問題は、『革命』にかかわるものではなく、『政党』にかかわるものである」と、加藤氏は視野を限定しているが、目的と手段とは相互規定的であつて、目的の内実の変化についての解明と切断して、目的と手段の「倒錯」として問題を設定することこそが「倒錯」だったのである。

したがって、残念ながら本書は、「コミンテルン型政治運動」の担い手の「レ

クイエム」とはなりえない。この課題は、本書が明らかにした事実をも活用して、歴史の現実と徹底的に依拠して、今日の時代における世界革命の道の探究という問題意識を貫いて果たす、がいにならない。

村岡到

加藤一夫 『情報社会の対蹠』

—図書館と幻想のネットワーク—

社会評論社

定価二五七五円(本体二五〇〇円)

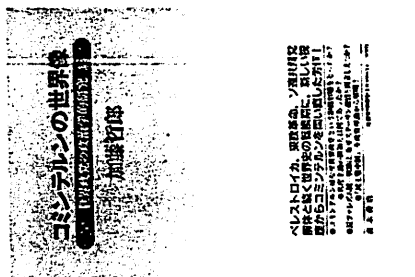
「図書館と幻想のネットワーク」というサブタイトルをもつ本書を、だからといって、いわゆる「図書館人のための本」と読んでしまうのは、少々早とちりということになってしまう。本書は著者自ら「あとがき」で述べているが、広い意味でのまさしく「図書館周辺論」なのである(もちろん図書館本質論も含まれている)。

以前に私は、敗戦直後、政府が十五年戦争敗北に対して出した総括に、科学技術とその情報の国家管理の不徹底をその

言あるだけで、上海の労働者が大衆に虐殺されたことは無視される。第一部四章に「以下では実践に即して」とか「現実との接点において検討する」と書いてある。これで三章までは実践と切断されていることを知らされるのだが、その後も大差はない。

主題が六回大会での綱領の確定過程の解明にあるとはいえず、「民族・植民地問題」についての無視・欠落も指摘せざるをえない。わずかに「マルクスやレーニンを本格的に学んだことのない植民地……の代表」として登場するにすぎない。

第二部の主題である人民戦線への「政策転換」の解明にとつては不可欠である。三三年の「ヒトラーの政権掌握」については「ひとまず起点にすえるべきだろう」とは言うが、それだけのことで、ここでは「……トロツキーの統一戦線論と『社会ファシズム論』批判こそ歴史的に再評価されるべきであらうが」と仮定法で書くだけで、注にすらトロツキーの批判はあげられない。このトロツキー敬



敗北の主要な理由の一つにあげ、その総括の延長線上に現在の情報のネットワーク化があることを、詳細な調査データをもとに分析・展開した論文(河出いこひ)を読んだことがある。本書はそういった図書館史の検証を中心にした、まさに科学技術立国日本の「知」の体系を、そして、情報社会の一面一面を読みとくためのテキストといえる。情報を収集・管理・活用するという機能機関としての図書館を通して、近現代の情報社会がある程度うきばりにされている本書は、著者の長期にわたる仕事の集成である。

ところで、図書館界というところはかなり偏狭なところで、大半の関係者は外に視線を向けることもなく、きわめて閉